

西部開拓が女性に与えた影響

L. I. ワイルダーの世界観を通して

文学部4年 正 亀 芳 恵

<目次>	1. 反応
はじめに	2. 価値観
I. 否定的に描かれた女性たち	3. ローラの反応で気になる点
1. 三人の反面教師	III. ローラの共感する人々
2. ブルースター夫人	1. マキー夫人
i. 描写について	2. ローラの父
ii. ローラの抱く感情	3. まとめ
iii. 当時の女性観	IV. 考察
II. ブルースター夫人に対するローラの 関わり方	おわりに

はじめに

アメリカの西部開拓時代を生きた女性ローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder 1867-1957) による『大草原の小さな家』シリーズ¹⁾が初めて出版されたのは1932年の世界恐慌のただなかであったが、大きな反響を呼び「どんな大恐慌も押しとどめることのできない奇跡の本」²⁾と評された。日本でもテレビドラマで放映されたので、ご存知の方もいるだろう。

作品は作者自身の実体験をもとに、子供の読者に配慮して創作された物語である。全9巻にわたる物語は1870年代から80年代の西部開拓時代を背景とし、主人公ローラ (Laura) が5歳の時にはじまり、大きくなって思春期を迎え、やがて教師となり、結婚して母となるまでを語ったもので、日常生活における親子、きょうだい、周囲の人間たちとの関わりの中で成長する姿を描いている。同時にウィスコンシンからカンザス、ミネソタ、サウス・ダコタ

へと移住しながら厳しい大自然の中で暮らすインガルス一家の生活をローラの目を通してリアルに伝えており、歴史的要素と自伝的要素が合わさった物語である³⁾。

今回はシリーズのうち、ローラの青春と社会人として歩み出す姿を描いた *These Happy Golden Years* [1971年] (鈴木哲子による訳本の邦題は『この楽しい日々』)を取り上げ、原文精読を試みた。内容の大筋を説明すると、15歳で教員免許を取得したローラは、初めて家を出て12マイル(約20キロ)離れた田舎の学校で教壇に立つ。その後町に戻り残りの学生生活を過ごす傍ら、2度教師を経験し、盲人大学へ通う姉の学費と家計の手助けをする。この間、はじめの教師生活で毎週金曜日と日曜日に下宿先と実家を馬に引かせたそりで送り迎えをしてくれた青年アルマンゾ・ワイルダー(Almanzo Wilder)との付き合いも深まり、18歳で結婚に至るという流れである。

この物語でとりわけ気になったのは否定的に描かれる女性である。なぜ否定的に描かれるのか。物語が主人公ローラの視点で書かれていることから単純に考えれば、彼女が反発を感じる人物、彼女の価値観では受け入れがたい人物であるからといえる。また、物語は常にローラの成長していく姿を描いていることから考えて、否定的に描かれた女性たちはローラの成長過程において「こんな女性になりたくない」と思う対象であり、その反発からローラの信念と人生観が打ち出されるという、いわゆる「反面教師」の役目を持って登場しているととらえることができる。逆にいえば、否定的に描かれた女性たちはローラの、ひいては作者ワイルダーの信念と人生観を知る一つの手がかりになりうる。

そこで本稿では否定的に描かれた女性を切り口として、物語を通して作者ワイルダーが発する「女性のあり方」について考察することを主眼とする。考察を進めるに当たっては否定的に描かれた女性はローラの反面教師である、という解釈を前提とし、第1章で否定的に描かれた女性を取り上げ、具体的な描写を通して嫌悪される理由について考える。第2章では、その反面教師との関わり方から浮かんでくるローラの価値観や信念を探る。さらに第

3章では、第1章であつかった人々とは逆の立場の人々、すなわちローラが共感する人々について取りあげたうえで、作品の発する女性のあり方を探り、西部開拓が女性に与えた精神文化の一面をとらえたい。

I . 否定的に描かれた女性たち

否定的に描かれた女性たちはブルースター夫人(Mrs. Brewster) , ワイルダー先生(Miss Wilder) , ネリー・オルソン(Nellie Oleson) の三人が挙げられる。ワイルダー先生とネリー・オルソンは既にこれまでの巻で登場しており、どちらも章のタイトルを飾っている⁴⁾ことから作者にとって無視できない存在であることは明らかである。一方ブルースター夫人は『大草原の小さな家』シリーズの中の『この楽しい日々』で初めて登場し、物語の前半部分において主要な人物となっている。今回題材に選んだ『この楽しい日々』で作者ワイルダーが比重を置くのはブルースター夫人であり、ワイルダー先生とネリー・オルソンは影が薄い。よって本章ではまず三人について紹介し、三人はそれぞれ何を志向しているのか、そして三人は物語の中でいかなる意義を持つのか、について考える。その後、特にブルースター夫人に的を絞りその女性像について考える。

1 . 三人の反面教師

ネリー・オルソンはローラと同年代であり生徒、学生として登場する。シリーズ中最も出番が多い。ローラが7歳でミネソタに移り住み、初めて通う学校の同級生で、「村の子」とローラをさげすみ、意地悪をする。後にダコタの新しい町の学校で15歳のローラと再会する。成長したネリーは、いつも日焼けしないよう白い肌を気遣う淑女を気取り、東部のニューヨーク州から来たことを鼻にかけ、開拓中のダコタを「荒れたところ(rough country) , そこにいる人々を「荒っぽい人々」(rough people) といってさげすむ⁵⁾。また、先生に取り入ったり、カップルの間に割って入って男性に媚びたりと相変わら

ず鼻持ちならない存在である。『この楽しい日々』では後にローラの結婚相手になるアルマンゾ・ワイルダーに横恋慕する形で出てくる。このネリー・オルソンという人物は、幼少期はネリー・オーエンス(Nellie Owens), 思春期はジュネヴィーヴ・マスターズ(Genevieve Masters)やステラ・ギルバート(Stella Gilbert)といった3人の実在の人物をモデルにしているという⁶⁾。

ワイルダー先生はローラが通うダコタの学校で担任となった人物である。後にローラの夫となるアルマンゾ・ワイルダーの姉である。「オールドミス先生」とローラが言っている⁷⁾ことや弟の年齢設定などから考えて彼女は20代後半～30代と推測できる。彼女は騒ぐ生徒を律することができず、ローラは彼女の指導法に疑問を持つ。またネリーをえこひいきし、彼女の偏見に満ちた言葉を鵜呑みにして生徒を騒がせる元凶はローラであると決め付けたことや、妹に不当な罰を与えたことにより、ローラは反感を強める。ただ、ワイルダー先生は『この楽しい日々』では間接的に出てくるのみである。せいぜい次の場面にすぎない。ひとつは、ローラの初めての教師体験の場面で、自分より年上の生徒が生意気な態度をとり、周りの生徒も勉強に集中しなくなって手に負えなくなり、「あの時先生もこんな心境だったのだ」と思い出す場面である⁸⁾。ふたつめは、終盤でアルマンゾと結婚式について話し合うときのことだ。ワイルダー先生が弟夫婦のために盛大な結婚式を考えていることを知り、迷惑がる場面である⁹⁾。

ブルースター夫人はローラが15歳で教師の資格をとり、自分の住む町から12マイル(約20キロ)離れた学校で初めて教鞭をとったときの下宿先の奥さんである。自作農民(homesteader)で学校委員を務める夫についてダコタ(現在のサウスダコタ)の払い下げ農地に住まい、幼い一人息子をかかえている。はじめからローラにぶっきらぼうで無愛想に接し、夜になると夫に怒りと不満をぶつける。教師になりたかったこと、東部へ帰りたいことをたびたび訴えていることから、西部開拓民(homesteader)であり、教育委員会の委員長(the head of school board)である夫について大草原の家に住み、下宿人を住ませる生活に不満を抱いていることがうかがえる。不満と怒りを内

に抑えた彼女の沈黙と、夜ごとの鬱憤晴らしのわめき声にローラはさいなまれる。ブルースター夫人は作者ワイルダーの実人生で初めて教師生活を送ったときの宿先の奥さんであるブシー夫人(Mrs. Bouchie)がモデルといわれている¹⁰⁾。

三人はそれぞれ、ローラと「同年代」であったり、「年上で未婚」であったり、あるいは「年上で既婚」と設定が異なり、職業も学生、教師、主婦と異なる。つまり彼女たちは、女生徒から教師になり結婚して主婦になるローラの成長過程において、意識せずにはいられなかった存在であり、いうなれば「人生の節目ごとの反面教師」ととらえることができる。分かりやすく言うと、ネリー・オルソンは「なりたくない少女」、ワイルダー先生は「なりたくない働く女性」、ブルースター夫人は「なりたくない主婦」としてローラの目に写り、彼女の生き方に少なからず影響を及ぼしたと考えられる。

ここで指摘したいのは、ワイルダー先生を除くネリー・オルソンとブルースター夫人の二人にある共通点が存在することだ。二人の共通点は、今いる開拓途上の西部は自分にとって安住の地ではなく、軽蔑に値するとし、自分が属するのは洗練された教養人の住む文化的東部であると考えている点である。ローラはそんな東部志向の彼女たちに共感できず、反発を感じるのである。この点でローラを彼女たちと対極に据えて言うならば、西部志向の女性であるといえる。一方ワイルダー先生はというと、彼女は東部のニューヨーク州から来たが、東部に心が向いていることを示す描写は無いので安易に東部志向や西部志向に分類することができない。はっきりしていることは、先にも述べたが、『この楽しい日々』では彼女の影がうすいことである。あえてワイルダー先生を除く東部志向の女性二人をこの物語に大きく登場させていることには、作者ワイルダーの何らかの意図を感じる。この疑問点については考察まで残すことにし、先にブルースター夫人の人物像を見ていくことにする。

2. ブルースター夫人

先に紹介したようにブルースター夫人はローラが初めて教鞭をとったときの下宿先の奥さんである。ここでは彼女の女性像について考える。その際注意しておきたいのは物語が常に主人公ローラの視点から描かれていることである。三人称で書かれているものの、作者ワイルダーは読者がローラの視点に立って物語を体験できるように配慮している¹¹⁾。したがってブルースター夫人についての描写から浮かんでくる女性像はあくまでローラから見た夫人の「一面」であり、何らかの偏りがあるといえる。このことを留め置いたうえで、夫人の描写を解釈も交えて具体的に見ていく。そして描写をもとにローラの抱く感情と当時の一般的女性観を視野に入れながら、どんな理由で夫人が嫌悪されているかについて考える。

i. 描写について

夫人の様子は、ローラが夫人に初めて対面する場面から、sullen(無愛想な、不機嫌な)という言葉で表され、この表現は頻繁に使われている。ローラが話しかけてもぶっきらぼうな返事が沈黙しか返さず、黙りこくっている。家事は滞りがちで、身なりにも気を使わず、子供が泣き喚いていても放っている。夜になると夫に不満をぶつける。ローラが下宿して第一日目の晩に聞いた不満は次のようなものである。

「こんな・・・と結婚していなければ私が教師になっていたのに」

「おめかしして一日中教室にすわっているだけの気取った小娘のために奴隷のように働くなんでごめんだ。ローラを追い出さないなら息子を連れて東部に帰る」¹²⁾

彼女は教師になるという夢を捨て夫について西部へきたことに不満を持っているのである。そして教師になれなかったことへの恨みからローラにも敵意を抱いているが、それはこじつけにすぎない。というのも、ローラが迷惑をかけまいと家事を手伝うようになると、彼女の不満の対象は、平らな土地や吹きすさぶ風、厳しい寒さ、といった自然環境にすり替わるのである。こ

こで夫人の本音が「東部へ帰りたい」ということであるとローラは気づく。

東部へ帰りたい一心で彼女はあらゆる手を尽くす。ある吹雪の日、それまで不機嫌に黙っているだけだった彼女が突然別人のように親切になり、ローラは驚く。外から帰ってきた夫が足をこすりだしたとき、駆け寄ってこするのを手伝い凍傷になるのを防ぐのである。しかしながら、彼女が夫の足をこすりながら「こんなひどいところ！」と言葉を漏らす場面からは、かいかいしく働く妻を演じることで夫を懐柔し！こんなひどいところ一刻も早く立ち去って東部へ帰りましょうよ」と夫を促すもくるみが透けて見える。しかしその働きかけは何の効果もなかったため、その晩、夫の枕元で肉切り包丁をふりかざすに至るのである。カーテン越しにローラが見る緊迫した夫婦の様子は次のようなものである。

「私、うちへ帰る方法は一つだけじゃないんですよ！」と彼女は言った。

「その包丁を置いて来るんだ！」

「帰ってくれるんですか、帰らないんですか？」

「もうそのことは繰り返して言わないぞ。お前とジョニーを養わなければならない。この払い下げ農地のほか何も無いんだぞ。包丁をしまっけて来るんだ。そして早くベッドに入らないと凍えてしまうぞ。」

夫人が包丁の柄をしっかりと握ると、包丁の震えが止まった。

「台所へおいて来い。」

次の瞬間、夫人は後ろを向いて台所へ行った¹³⁾。

この場面はぞっとするものである。しかし注意深く見ると、彼女がどんな手を使っても結局夫の権力に抑え込まれているということがいえる。肉切り包丁で脅すという強行手段は「お前とジョニーを養わなければならない。この払い下げ農地のほか何も無いんだぞ。」という言葉によって鎮圧されるのだ。夫人が包丁の柄を固く握り締める様子にはどんなにあらがっても結局夫に従うしかないことへの怒りと悔しさが表れていると解釈できる。

端的にいえば、ブルースター夫人は、自分の望みに固執するあまり、周囲の人間に当たり、家庭を崩壊させ、自己も破綻させている救いがたい人物として描かれている。なんとか東部に帰ろうと夫に働きかけるが、最終的に夫に従わなければ生きていけない女性の立場の弱さも垣間見える。

ii . ローラの抱く感情

ローラが夫人をどう見なしているかはっきり分かる箇所は非常に少ない。探しうる限り挙げると、ローラにかこつけた不満を耳にし「彼女は私自身に怒っているのではなくただ怒りをぶつきたいだけなのだ。わがまま (selfish) で意地悪な (mean) 人だ」というところ¹⁴⁾と、すべてが終わってわが家に帰り、その心地よさを実感しながら「ここには醜い怒りの爆発もない」と感じる部分¹⁵⁾だけである。しかしながらそこには「わがまま」「意地悪」「醜い」といったローラの歯に衣着せぬ感情表現があり、ローラが夫人に嫌悪感を抱いていることは疑いようも無い。

それは、読者に伝えられるブルースター家の有様からもうかがい知ることができる。ローラの観察眼を通して伝えられる情報は、夫に関するものはほとんど無く、専ら夫人に集中している。そしてそれらは、髪をとかさず、ベッドも整えず、夫の靴から落ちた雪を掃きださずに放っておいたため、解けた雪がストーブの灰と混じって床に汚い水溜りを作っている¹⁶⁾など、夫人を取り巻く見苦しい空間である。

夫人を観察することでローラが学ぶことは居心地のいい家庭を築くことの大切さである。ローラは夫人とその荒れた家庭を目の当たりにし、自分の家庭がいかに立派に機能しているかを知るのである¹⁷⁾。ローラの家では食卓で楽しい会話が飛び交っているが、夫人の家では沈黙が重苦しく漂う食卓である。家庭は心のよりどころであり、それが機能していなければ心も壊れるということを悟ったのである。

iii . 当時の女性観

緒方房子によると、19世紀アメリカにおいては「ヴィクトリア朝的女性像」と呼ばれる価値観が一般的であったという。イギリスのヴィクトリア女王治世（1830～1901）にこのような女性観が普及したことに由来する。敬虔さ、性的純潔、男性への従順、家庭的であること、四徳目が、女性の持つべき規範的美徳として女性雑誌、ギフトブック、新聞、宗教的小冊子、牧師の説教などに1830年以降頻りに現れ、約一世紀の間アメリカの女性たちはこの美徳に従ったり、反発したり、利用したりしながら固有の女性文化を作りあげていったという。先の四徳目の美徳を備えた女性をレディーと呼び、「女の領域」、「私的な」領域である家庭に女性を閉じ込め、家事・育児に専念する「専業主婦」を理想視するようになったという¹⁸⁾。

ブルースター夫人はヴィクトリア朝的女性像から明らかに外れている。彼女は家事をなおざりにし、育児を放棄し、夫に従うことへの怒りを感じている。当時の一般的な道徳観から非難に値する人物なのである。ローラが夫人の家の見苦しい様子を目にするところや、週末わが家に帰って、居心地よく整えられている居間を見回し、それまで意識しなかった自分の家の美しさを実感し、家庭の価値を見直しているところに着目すれば、ヴィクトリア朝的女性観にのっとなって夫人を嫌悪しているといえなくもない。しかしこの説明では不十分である。

というのもローラがヴィクトリア朝的女性観を信奉しているかといえれば必ずしもそうではないからだ。彼女は小さいころから「おてんば娘」で「父さん」について家を建てる作業を手伝ったり、畑仕事を手伝ったりする。いつも身なりに気を使い、教会でも静かに座って話を聞いている「良い子」である姉メリー（Mary）と対照的である。女性のたしなみとされた裁縫を母に教わり、その腕前は仕立て屋の手伝いを頼まれるほどだが、ローラ自身は決して裁縫が好きではない。『この楽しい日々』の後半でも、教会に行くために、最新流行のペティコートやフープ（スカートを膨らますためのもの）を着付け、新調したばかりの服と帽子で身を包み、髪をアップにして巻いている口

ーラを見た妹が「あたしも今に若いレディーになったら、それとすっかり同じ服を稼いで作るよ。」というのを聞き、「若いレディーである自分を好きかどうか分からない」と感じている¹⁹⁾。また彼女は婚約者のアルマンゾに「結婚式の誓いの言葉にある『夫に従う』という部分を言わないことにする」と宣言し、同意してもらう²⁰⁾。

篠田靖子はローラについて「伝統的な女性像の枠組みから少しはみ出しながら、しかし当時の社会通念が認める範囲内で自由に振舞っていた²¹⁾」と述べている。この見解には同意できる。ローラはヴィクトリア朝的規範を踏襲しつつもその枠に安住しない独自の価値観を形成していると考えられる。ブルースター夫人を否定的に見る理由にはヴィクトリア朝的価値観の枠に収まらない価値観が影響している。ローラ独自の価値観を探るために、次の章でローラがブルースター夫人との関わりを通してどう反応したかを見ていく。

Ⅱ．ブルースター夫人に対するローラの関わり方

1．反応

ブルースター夫人と過ごす生活でローラのとった反応について順を追って見ていく。はじめのうちは無愛想だと感じて、少しでも話しかけてもらえないかと望みを抱きながら笑顔で挨拶をしたり話しかけたりする。しかし夫人は沈黙しているので彼女は取り付く島もない。夜の夫婦間の口論にさいなまれローラは何度か他の家に泊まりたいと思うのだが、他の二軒はすでに人が満員で行く当てがなかった。彼女はホームシックにかかり、毎週金曜日家に帰ることで、それまで気にとめていなかったわが家の心地よさに気づく。実家での彼女は、学校で生徒をうまく勉強に集中させることができなかったことについては話すものの、下宿先での惨めな生活については黙っている。3週目にさしかかるころには慣れてきて、日々のパターン化された生活を順序良くこなしていく。相変わらず気まずく憂うつであったが、残りの週を勘定し「私にできることは一日一日を乗り越えていくのみだ」と言い聞かせて

過ごす。肉切り包丁の件ではたいそう脅え、眠っている間に夫人がローラの前で包丁を振りかざすのではないかと怖くなる。しかし「何があっても恐れてはならない」という父の言葉を思い出し、自分はすばしっこくて強いフランス馬のようであるから実際のところ夫人を恐れることはないのだ、と自分を信じ、残る週をなんとか乗り切るのである。

2. 価値観

この一連のローラの態度からわかるのは「忍耐力」や「独立心」を重んじていることである。中でも際立っているのは「忍耐強さ」である。使われている言葉に注目してみてもbear(耐える)やget through(切り抜ける)²²⁾という表現が頻繁に出てくる。驚くべきことは実家で家族に一言も夫人のことを言わず隠し通すところである。もし夫人のことを話せば両親は心配するだろうと考え黙っているのである。肉切り包丁の件の後、睡眠不足であった彼女は実家で珍しくとうとうとし、母を心配させるが、「ただ少し疲れただけよ」といって努めて元気にふるまおうとする²³⁾。包丁のことを言えば両親は彼女を学校に返さないだろうし、そうなれば途中放棄になり、永久に教師としての道を閉ざされてしまうことになる。彼女はなんとしても新人教師としての8週間をやりとげなければならないという信念のもと、最後まで家族に隠し通して乗り切るのである。辛さを自分の内に隠して責任を果たす様子は、ローラが少女から大人へ成長する姿ととらえることができる。

3. ローラの反応で気になる点

ひとつ気になるのはローラがブルースター夫人にまったく同情や共感を寄せないことである。この物語ではローラの心境については丁寧に述べられているものの、ブルースター夫人の心境についてはほとんど追及されていない。ローラを通して実に客観的に厳しく突き放して描かれているのみである。

教師になる夢を捨て夫について西部にきたブルースター夫人は大草原での

生活に順応できず東部に帰りたがっている。ある意味で夫の権力に振り回された被害者である。感情を爆発させヒステリックな形で夫に反抗する様子は、ともすれば狂人じみた人物ととられかねないが、先に述べたように当時の女性が家庭という領域に幽閉された存在であったことを考慮すれば、ブルースター夫人のストレスと鬱憤は起こるべくして起こったものといえる。夫への従属にもがく哀れな存在という見方もできるはずである。

またウィリアム・アンダーソンはブルースター夫人を「風の吹きすさぶ、がらんとしたさびしい大草原の暮らしに絶望した女たちの典型的なタイプ」と説明している²⁴⁾。この説明は的確である。彼女が夫にぶつけている不満からは大草原の風や寒さやだだっ広さに対する嫌悪が読み取れる。場所は異なるが、カンザスの開拓についてまとめたある文献によると「開拓民たちは、お互い何マイルも離れて住んでいたため、荒野の厳しい生活に自力で立ち向かうしかなかった。男女を問わず、孤独感、心細さは日々の生活につきまとった²⁵⁾」という。ブルースター夫人の女性像はシリーズ全体を見渡しても他に例が無いので特異な存在に見えるが、実はそれほど珍しいものではなかったことが分かる。

しかしローラが夫人に同情や共感をするのは一切無い。ローラを口実に鬱憤晴らしをする夫人を「身勝手に、意地悪な人だ」と感じたり、すさんだ妻を前に常に沈黙を守る夫を見て「私も耐えるしかないのだ」と自分に言い聞かせたり²⁶⁾することはあっても、夫人を「気の毒」と感じることはないのである。

Ⅲ．ローラの共感する人々

ローラがブルースター夫人に共感しない理由について考えてみる。指摘できることは夫人にはローラが重んじているような「忍耐力」が全く見られないことである。彼女は自分の希望どおりにいかない現状に絶望し、周囲の人に当たって家庭を崩壊させ、自分自身をも崩壊させている。その姿がローラ

にとって非難に値し、大人の女性としてあるまじき姿ととらえているのではないかと考える。

自分の夢や希望のままに自由に動けないのは夫人に限ったことではない。この物語では希望のままに行動できない環境で束縛を感じながらも何とか乗り切ろうとする人々の姿が多く認められる。ローラが共感するのはそういった人たちである。そしてその人物との関わり方から読み取れるのは「人間には忍耐が大切であり、忍耐の先には成功と幸福がある」という考え方である。忍耐といっても様々だが、しいていうならば「自分の希望どおりにいかない現状に腹が立っても逃げ出したくなくても、どうにかやり過ごす忍耐力」である。それはローラが大人になる過程で獲得していく価値観といえる。

具体的にローラの共感する人を2人挙げ、ローラがその人々との関わりを通して形成し、確立していく精神について見ていく。

1. マキー夫人

一人は町の仕立て屋であるマキー夫人 (Mrs. McKee) である。彼女は夫と離れて夏の間娘と一緒に払い下げ農地小屋に住まなければならない、町から何マイルも離れた誰にも会うことの無い大草原で暮らすのは寂しくてたまらないので、それまで夫人の針仕事を手伝っていたローラに週1ドル払うから夏の間一緒にいて欲しいと依頼する。

ダコタの開拓家族は厳しい冬の間は畑仕事ができないので町に住み、雪が解けると農地に帰って土地を耕したり農作物を育てるとい生活をしてきた。このことはローラと学友が四月の雪解け道を歩きながら「もうじき春になって学校が終われば私たちはまた農地へ帰るんだわ」と話している²⁷⁾ことから分かる。

マキー家では冬の間妻は仕立ての仕事をし、夫は材木置き場で働いてお金を稼いだが、農作業に必要な道具や種や家畜を買うお金が足りず農地へ戻ることができないという問題に直面していた。ホームステッド法 (Homestead Act「自営農地法」や「自作農地法」と訳される) では一年のうち6カ月間は

申請者または家族の者がその土地に住まなくてはならないと定められている²⁸⁾ので、夫が町に残ってお金を稼ぎ、妻と娘は農地に住むという苦肉の策に出るのである。この策は夫が提案したもので、夫人は「農地など手放してしまいなさい」といったんは退けたものの最終的に協力するのである。農地に着いた夫人は「法律が開拓者の妻や家族にこんなことをさせているのだ。農地に誰もいなくていいなら町で仕立ての仕事をし道具や種を買う費用のたしにするのに」と憤慨し、「女性に投票権があればもっと分別のある法律を作ったのに」と言いつのる²⁹⁾。

彼女とその娘だけで過ごすことで、ローラは他の誰にも会わず、家事をして、食べて、寝て、風の音を聞くだけの生活に寂しさと虚無感を感じる。そしていつしかホームシックにかかっている自分に気づき、母から「姉メリーが大学から帰ってくるので代わりに人が見つければ帰ってくるように」という手紙が届いたのを機に実家に戻ることになる。しかし家に戻ってからも時おりローラは寂しい払い下げ農地の家にいるマキー夫人と娘を気にかけているのである。

客観的に見れば、マキー夫人との共同生活でローラが味わう孤独感は、ブルースター夫人も味わっていたものといえる。離れ離れの点在する農地に住み、人とめったに会うことの無い大草原の孤独は、開拓時代の女性が味わうものとして決して珍しいものではなかった。マキー夫人とブルースター夫人は共に大草原の孤独にさいなまれる女性であるが、ローラが思いやりの心を示したのはマキー夫人であった。

作者ワイルダーがブルースター夫人を否定的に描き、マキー夫人を共感のこもった描き方で描写するのはなぜか。マキー夫人がローラを気に入って良好な関係であったせいでもあるが、決定的な違いと言えることは、マキー夫人は現状に憤慨しながらも、払い下げ農地を維持するために「耐え忍ぶ」姿勢を持っているということである。それはマキー夫人がローラに「ここに慣れてきたし 私たちだけで大丈夫だから帰りなさい」³⁰⁾と言うところからうかがえる。寂しさを感じても法律が憎いと思っても何とか踏みとどまってい

るのである。

2. ローラの父

もう一人はローラにとって身近な存在である父チャールズ・インガルス (Charles Ingalls) である。彼はダコタに定住者が増えてきたことに息詰まりを感じ、ある日妻キャロライン (Caroline) に「西部へ行きたい」と話す。しかし妻は「チャールズ！あなたの周りにこんなに広々とした大草原があるのに場所が無いですって？私はあちこち引っ張りまわされるのはごめんです。ここに落ち着いたと思ったのに。」と夫を諷める。すると彼は「まあ、その通りだな、キャロライン。いらいらするな。ただわしの放浪好きの足がむずむずしてきたのさ。とにかくわしはまだアंकクル・サムとの賭けに勝っておらん。わしらは勝つまでここにいるんだ！わしがこの払い下げ農地をやりとげるまではな！」という³¹⁾。アंकクル・サム (Uncle Sam) とは United States をもじったもので、米国 (政府) を擬人化した呼び名である³²⁾。ローラの父は人の多いところでは落ち着かず、広々とした大草原を愛しており、一カ所にとどまっていられず、西へ西へと心が駆り立てられる。しかし教育熱心な妻キャロラインは学校の整っていない西部への移動に賛成できないのである。インガルス一家は物語の中でウィスコンシンからカンザス、ミネソタ、ダコタへと移住するが、キャロラインは「娘たちに必ず学問をさせる」という約束を夫に取り付ける。一家にとってダコタ行きは最後の移住であった。このときローラは西に広がる大草原をじっと見つめる父の姿を見て、父を理解する。彼は西へ行きたい自分の衝動を抑えて生活が安定した土地にとどまることで、家族を気遣いしているのだ、と。そしてそれはちょうどローラが教室に閉じ込められているのがどんなに嫌いでも教えなければならないのと同じであると共感している。

3. まとめ

ローラはマキー夫人や父の姿から、「家族の幸福」のためには「克己心」を

持つことが必要であることを学びとっているとらえることができる。彼女が教師をつとめるのも家族の幸福のためである。目下の目的は盲人のための大学に通う姉メリーの学費を助けるということであり、またかつて教師であった母が娘の中から一人教師になって欲しいと願っていたこともあって、教師になることを決意した。そこには仕事そのものに対する興味や、仕事を通して自己実現したいといった感情はまったく無い。あくまで必要に迫られて選んだ生き方である。

開拓生活において家族の結束は不可欠であり、家族の幸福を考えることが開拓生活を成功させることにつながった。そして家族の幸福を考える上では、自分の置かれている現状に満足する態度がしばしば必要になってくる。「開拓生活」と「家族」は切っても切れない間柄にあり、そこでは「個人」が忍耐を持つことが要求される。開拓生活が「忍耐」や「克己心」といった自己を規制する精神をもたらしたのは自然の成り行きだったと考えられる。

Ⅳ．考察

ブルースター夫人を中心とする否定的に描かれた人々とマキー夫人やローラの父のように肯定的に描かれた人々とを対比して検討してきたが、周囲の大人たちを通してローラが認識するのは「家庭の重み」と「忍耐の大切さ」である。家族の結束力と忍耐力はどちらも厳しい自然環境における開拓生活を営む上で必須のものであったことはブルースター家、マキー家、インガルス家それぞれの事情からよく分かる。また、ブルースター夫人、マキー夫人、ローラの母といった開拓者の妻たちを見ると開拓が女性に強い苦労もうかがえる。夫とうまく折り合いをつけ、協力関係を築くことが成功につながったことは3人の例から明らかである。

興味深いのは西部開拓という現象を起こした発端であるホームステッド法がいかに人々に影響を与えたかということである。マキー夫人とローラの父の例から分かるように両者の「希望どおりにいかない現状」を作り出してい

る原因はまぎれもなくホームステッド法である。ホームステッド法は「21歳以上の家長であれば誰でも西部の公有地160エーカーを手数料10数ドルで登録でき、5年間定住して耕作に従事すればその土地が無償で与えられる」³³⁾というものであり、多くのアメリカ人を惹きつけた³⁴⁾。彼らの楽観的な考えが現れた歌がある。

“ Oh, come to this country,	さあ、やっといで、このくにへ
And don't you feel alarm,	なにもびくびくするこたない
For Uncle Sam is rich enough	<small>おくの おやくしよ</small> アンクル・サムは金持ちで
To give us all a farm! ”	みんなに農地をくれるとさ！ ³⁵⁾

ローラの父もホームステッド法に希望を見出し、ウィスコンシンを出発するが、申請してたどり着いたカンザスの土地が先住民の居住地域であったため、家に窓をはめたばかりのところを去らなければならず、ミネソタで異常気象によるイナゴの大量発生で不作に見舞われ、生活が困難になるたびに移住をくり返した。

この法律は元来「自由」を手に入れるためということを書いて文句にして西部開拓の旋風を巻き起こした。しかし皮肉にも、ときに開拓家族を「束縛」し、大いに翻弄した法律といえる。現実にはマキー夫人のように町で働いてお金を稼げるのにわざわざ寂しい農地で何もせずにとどまらなければならなかったり、ローラの父のように土地を手に入れるまで何度も失敗を重ね闘い続けなければならなかったり数々の試練を開拓者の家族に課したのである。ブルースター一家はホームステッド法に振り回され崩壊した家族といえる。

ローラの父は払い下げ農地をアンクル・サム（米政府）との「賭け」であるという。彼の考えでは「政府は男がひとりで飢え死にしないで、5年間いられるかどうか、半マイル四方の土地を賭けている」³⁶⁾のである。物語の終盤では政府との賭けに勝利の兆しが見える。インガルス一家は農地の家を建て増してオルガンを据えるなど豊かになり、残り18カ月で「払い下げ農地」ではなく「自分たちの土地」を持つことになるのである。母キャロラインの「この家ね、もうわたしたちは払い下げ農地の小屋なんていってはいけない

よ。』³⁷⁾という言葉は長い苦難の末ようやく獲得した喜びを表している。

この物語ではあきらめずにダコタの払い下げ農地にとどまり家庭を築き上げたインガルス一家の誇らしさを前面に出している。そのため東部志向をくじく傾向が潜在的にある。ブルースター夫人の望む「東部へ帰る (go back east)」という言葉は物語ではマイナスの響きを持つ。東部へ帰ることは開拓者にとって「あきらめる」ことであり「敗者」を意味するのである。ブルースター夫人が突き放して描かれるのは土地にとどまろうとする者の立場からすれば「弱音を吐いている」に過ぎず、情けをかけるに値しないためととれる。またネリー・オルソンについても、終盤で少々邪険に扱われている。ローラは彼女の農地を通りかかったとき、家がとても小さく、馬を持っておらず、農地があまり耕されていないのを目にし、少し憐れみを感じるが、「こんなにいいお天気の日をネリーのことを考えてだめにしたくない」と考えすぐに目をそらす³⁸⁾のである。そして最終的にネリーはいつの間にかニューヨークに帰ってしまうのである。

また、物語は「町」、「家庭」、「個人」の成熟を重層的に描いている。ダコタの町に人が増え発展していく様子、インガルス一家が定住し豊かになる様子、ローラが教師として働き成熟した大人になる様子が重ねられているのである。ワイルダーは「成熟」をテーマにこの物語を書いたのではないだろうか。そしてとくに主人公ローラの「成熟」を示すにあたってはその対極として「未熟」な存在を引き合いに出す必要があった。東部志向のブルースター夫人とネリーが大きく取り上げられたことにはそうした意味があったと考えられる。第一章で述べた疑問の答えとしてここに添えておく。

改めて振り返ると、「闘い耐え忍んだ先には幸福がある」という人生観がこの物語から発信されているといえる。最終的に幸福を獲得するという目的を据えているところは楽観的だが、同時に人生は忍耐と闘いの連続であるという厳しさも兼ね備えている。自然との闘い、法との闘い、自分の個人的な欲望を御する闘い、あらゆる面で闘わねばならなかったのである。それはまぎれもなく「開拓者精神」と呼ばれる精神のひとつであり、決して男性だけに

育まれたものではなく、女性にも備わったものであることをこの物語は教えてくれる。

おわりに

『大草原の小さな家』シリーズは出版当初より絶大な人気を博したことから、作者ワイルダーの人生観が多くの人々の共感と呼んだことは確かである。1941年に出版された『この楽しき日々』も評価が高い。「さわやかな文学でわくわくするような物語であり、真正のアメリカを語っている。すべての子供に与えるべき本である」といったものや、「ローラと家族についての双書の中には、アメリカ辺境時代の新鮮さと力強さがみち溢れている。当時ミシシッピのあなたには、誰でも請求できる土地があった。この双書は、小説化されたアメリカ合衆国の歴史の中で、高い地位を持っている」といったものである³⁹⁾。

ただし、『小さな家』シリーズの発信する考え方がアメリカ西部開拓時代の女性の考え方である、と強引に一般化することは危険である。というのも、作者が生きた世界は確かに開拓時代のアメリカではあるが、暮らした土地はウィスコンシン、カンザス、ミネソタ、ダコタといった「北西部」や「中西部」と呼ばれる地域である。また、白人は白人のコミュニティを形成し、先住民や黒人とは住み分けがあった世界である。作品にあるのは一つの限られた枠内でのアメリカ西部開拓の姿なのである。この点に注意しなければ、読み手は作品を半分しか解釈したに過ぎない。

読者は本の中の主人公ローラに感情移入して物語を体験するため無意識に作品の持つ価値観に付き従い、主人公が良いと思う人物は読者も賛同し、嫌な人物と主人公の目に映る人は読者も嫌悪感を抱く。そしていつの間にか作品の放つ偏った考え方を別段疑問や違和感を持たないまま取り込みかねない。正直に告白すれば筆者自身もそうだった。『大草原の小さな家』シリーズは小学生のとき何度もくり返して読んだ愛読書であり、生き生きとした主人

公に魅せられ、無意識にアメリカに好意をもっていたものだ。今になってようやく物語の世界に浸るのみの段階から脱すべく再読を試みた。今回取り上げた『この楽しい日々』は年齢的な距離を感じて私の少女時代にはあまり手を伸ばしていなかったものである。ただ初めて読んだときはブルースター夫人がどうにも不可解な人物であったことを記憶している。彼女についての疑問を追及することが今回の研究のきっかけになった。

今回は原文1冊を選び精読に努めたが、他8冊は未読である。また同時代の作品で異なる地域の開拓生活を扱ったものがいくつかあることを知ったが、それらとの比較にまでは至らなかった。これらは今後の課題としたい。

注

- 1) 『大草原の小さな家』シリーズは『大きな森の小さな家』『大草原の小さな家』『農場の少年』『プラムクリークの土手で』『シルバーレイクの岸辺で』『長い冬』『大草原の小さな町』『この楽しい日々』『はじめての四年間』の9冊をさす。『はじめての四年間』は作者の死後、出版された。
- 2) ハーパー・アンド・ブラザーズ社(Harper and Brothers), 児童部門の編集者ヴァージニア・カーカス(Virginia Kirkus)の言葉(磯辺 [3] 50 - 52頁参照)
- 3) 物語の説明については、定松 [5] 172頁、磯部 [3] 4頁を参照した。
- 4) 『プラムクリークの土手で』および『この楽しい日々』で「ネリー・オルソン」のタイトルがある。『大草原の小さな町』には「ワイルダー先生」のタイトルがある。
- 5) Wilder [9] 原文 p.133・訳本180頁
- 6) ミラー [7] 55頁、84頁参照
- 7) [1] 原文 p.136・訳本(上) 192頁
- 8) [1] 原文 p.51・訳本(上) 79頁
- 9) [1] 原文 pp.268 269・訳本(下) 173 - 175頁
- 10) 磯部 [3] 22頁参照
- 11) 『小さな家』シリーズの創作にあたっては娘ローズの協力があつた。ローズはすべてをローラの目を通して語ることを強調し「ローラの目の中に止まっていなさい」と母ワイルダーに助言したという。(ミラー [7] 342頁参照)
- 12) [1] 原文 p.10, p.22・訳本(上) 22 - 23頁, 39頁 * 訳は一部拙訳を加えている。

- 13)[1] 原文 pp.64 - 65・訳本(上)101 - 102頁 * 主要な台詞のみ引用, 訳は一部拙訳。
- 14)[1] 原文 p.23・訳本(上)39 - 40頁
- 15)[1] 原文 p.101・訳本(上)147頁
- 16)[1] 原文 p.46・訳本(上)73 - 74頁
- 17) 黛 [8] 66頁参照
- 18) 緒方 [10] 86 - 87頁参照
- 19)[1] 原文 p.164・訳本(下)31頁
- 20)[1] 原文 p.269・訳本(下)175 - 176頁
- 21) 篠田 [11] 19頁
- 22) 例えば, 原文 p.23, p.78
- 23)[1] 原文 p.82・訳本(上)122頁
- 24) アンダーソン [4] 117頁参照
- 25) ストラットン [6] 104頁
- 26)[1] 原文 p.23・訳本(上)39 - 49頁
- 27)[1] 原文 p.102・訳本(上)149頁 * ローラと学友の会話を筆者が要約。
- 28) アンダーソン [4] 9頁参照 * アンダーソンは「一年のうち6カ月間」としているが, 物語では, マキー夫人が法律について不平を言う台詞の中で「一年のうち, 七カ月(seven months of the year)」([1] 原文 p.119・訳本(上)170頁) となっている。
- 29)[1] 原文 pp.118 - 119・訳本(上)170頁 * マキー夫人の台詞は原文と訳本を参考に筆者が要約。
- 30)[1] 原文 p.121・訳本(上)174頁 * 台詞は筆者が要約している。
- 31)[1] 原文 pp.138 - 139・訳本(上)195 - 196頁 * 台詞は訳本そのままではなく, 一部拙訳。
- 32) ジーニアス英和大辞典参照
- 33) 磯辺 [3] 6頁
- 34) アンダーソン [4] 8 - 9頁参照
- 35) Wilder [2] p.62・恩地 [2] 82頁
- 36)[1] 原文 p.118・訳本(上)170頁
- 37)[1] 原文 p.159・訳本(下)24頁
- 38)[1] 原文 pp.171 - 172・訳本(下)41頁
- 39) ミラー [7] 368 - 369頁参照

参考文献

- [1] Laura Ingalls Wilder, *These Happy Golden Years*, rev. ed. (New York : Harper Trophy, 1971)
鈴木哲子訳, 『この楽しい日々』, (上下), 岩波書店, 1974年
*注ではワイルダー著を「原文」, 鈴木訳を「訳本」としている。
- [2] Laura Ingalls Wilder, *By the Shores of Silver Lake*, rev. ed. (New York : HarperCollins Publishers, 1953)
恩地三保子訳, 『シルバー・レイクの岸辺で』, 福音館書店, 1973年
- [3] 磯部孝子著, 『ローラ・インガルス・ワイルダー』, KTC中央出版, 2004年
- [4] ウィリアム・アンダーソン著, 谷口由美子訳, 『大草原のローラ』, 講談社, 1994年
- [5] 定松正 (編著), 『イギリス・アメリカ児童文学ガイド』, 荒地出版社, 2003年
- [6] ジョアナ・ストラットン著, 井尾祥子・当麻英子訳, 『パイオニア・ウーマン』, 講談社, 2003年
- [7] ジョン・E・ミラー著, 徳未愛子訳, 『ローラ・インガルス・ワイルダー伝』, リーベル出版, 2000年
- [8] 野口啓子・山口ヨシ子編, 『アメリカ文学に見る女性と仕事』, 彩流社, 2006年
*本書のうち, 黛道子「荒野に夢をかけた女たち」を参考にしている。
- [9] Laura Ingalls Wilder, *Little Town on the Prairie*, rev. ed. (New York : HarperCollins Publishers, 1953)
鈴木哲子訳, 『大草原の小さな町』, 岩波書店, 1993年
- [10] 武田貴子・緒方房子・岩本祐子著, 『アメリカ・フェミニズムのパイオニアたち』, 彩流社, 2001年
- [11] 篠田靖子著, 『アメリカ西部の女性史』, 明石書店, 1999年